

第2回 教室学び合いフォーラム2006

主催 子どもに学ぶ教師の会

後援 新潟県教育委員会
新潟市教育委員会
上越教育大学
臨床教科教育学会

1日目:2006年7月28日

シンポジウム・懇親会

ミナミプラザ

2日目:2006年7月29日

講演・パネルディスカッション・公開ゼミ

新潟県立生涯学習推進センター

「子どもに学ぶ教師の会」設立とフォーラム開催にあたって

我々教師は子どもたちに対して、「このように勉強しなさい」と自信たっぷりに指示します。しかし、子どもたちに対して、それを指示できるほど「勉強すること」が分かっているのでしょうか？

別の問いかけで考えてみましょう。我々教師が、子どもに「このように勉強しなさい」と言えるほど「勉強」が分かったのはいつでしょうか？中学生の頃でしょうか？つまり中学生ぐらいになれば「勉強すること」が分かるのでしょうか。そうだったら、中学生は我々教師と同等に「勉強」が分かっているのですから、我々教師は中学生に偉そうに指示できません。高校生の頃でしょうか？そうだったら高校生はもう十分に勉強できるはずなのですから、我々教師が高校生に偉そうに指示できません。では大学生の頃でしょうか？それだったら小学生、中学生、高校生に対して偉そうに指示できます。しかし、大学でそんなことを学んだのでしょうか？大学の講義の中の「原理」、「概論」を学んだから、「勉強が分かった」のでしょうか？大学の講義はそのような講義内容だったのでしょうか？多くの教師は「否」と言うのではないのでしょうか？多くの教師は、今の自分にしてくれたのは子どもであると感じていると思います。教師が「これはいい勉強」と思いこんでも、子どもは「それは違うよ」と教えてくれます。なによりも、子どもが聞いてくれません。聞いてくれたとしても、目が死んでおり、聞いているふりをする子どもの姿で、ロボットのような子どもの姿で、自分が誤っていることを教えてくれます。さらに、どんな管理職より厳しい鉄槌を下します。もちろん、子どもの姿を見ていなければ気づかないかもしれませんが、しかし、子どもが聞いたふりをして、ロボットのようになっても、それを喜んでいるとしたら、それは管理職の鉄槌よりも、恐ろしいことではないでしょうか？

一方、たとえ自分が意識しなくても、正しいことをすれば、子どもは「それ、凄くいいよ」と教えてくれます。生き生きした子どもの姿、自分の予想を遙かに超えた姿で、教育の素晴らしさを教えてくれます。子ども達は、どんな管理職より素晴らしいご褒美をくれます。我々教師はそのような教師人生の中で成長します。そして、教師の教師は「子どもたちの姿」とであると自覚します。

目標の設定も同じです。何を学ぶべきか、その社会が定めるものです。しかし、それを子どもたちに納得させ、共感させるのは教師の仕事です。そのためには、教師自らが「何を学ぶべきか」をしっかりと理解しなければなりません。「何を学ぶべきか」は、教育に関する諸法、また、指導要領に示されています。しかし、それを子どもたちに説明しようとするとき、その意味を理解することが難しいことに気づきます。では、何をもとに理解したらいいのでしょうか？それは「勉強」の仕方、即ち、教え方を学ぶように、生の子どものたちに語り、それに対する「子どもたちの姿」から学ぶしかありません。

そのため、我々は出来るだけ子どもたちの姿を謙虚に見たいと願います。「出来るだけ」

は、置かれた環境によって様々です。しかし、教卓よりは子どもたちのすぐ脇で見たいと願います。アンケート用紙の選択肢のよりは、子どもたちの文章、さらには子どもたちの生の声を聞きたいと願います。一人の子どもの声より、二人、三人、さらに十人、二十人の声を聞きたいと願います。また、一回ではなく、二回、三回、いや、ずっと継続的に声を聞きたいと願います。

その子どもたちの姿によって、我々は自信を持って何を学ぶべきかを語れる、また、どのように学ぶべきかを語れる教師に成長したいと願います。しかし、一人の教師が出来ることは限られています。一人の教師が経験できる「子どもたちの姿」も限られています。思い出してください。自分が「子どもたちの姿」を通して学ぼうとして、挫折したとき。いや、「子どもたちの姿」を見ずに授業をやっていたとき。その時、自分を支えてくれたのは何でしょうか？それは「人」であるはずで。そして、その人はどんな人であったでしょうか？それは歴史に名を残すような教師ではなく、普通の教師かもしれません。しかし、絶対に子どもが悪いと否定はせず、日々の実践での子どもたちの姿を通して喜んでいく教師ではなかったでしょうか。そのような教師によって、我々は挫折を乗り越え、教師としての喜びを見いだしています。しかし、我々が助けられた、その教師も、実は、未熟な自分が喜ぶことによって、教師としての確信を得ていたはずで。

我々は決してスーパーマン教師ではないですし、一生かかってもスーパーマン教師にはなれないかもしれません。でも、それでいいじゃないですか！普通の教師、でも、「子どもたちの姿を通して学ぼうとする教師」が集い、それらの教師が見た子どもたちの姿を共有することによって、一人のスーパーマン教師より多くの喜びを教師人生で得られる教師に成長出来ます！その喜びを、多くの年長の教師、若い教師、様々な教師と、ともに感じ、誇りある教師人生を実現しませんか？

一人の子どもは、時に、無力で愚かかもしれません。しかし、子どもたちは強力で賢明です。何故なら、彼らにとっての学校の時間は、人生の重大事です。つまり、人ごとではなく、自分の人生を賭けた人間が集っているのですから強力にもなり、賢明にもなります。同じように、一人の教師は、時に、無力で愚かかもしれません。しかし、教師たちは強力で賢明です。なぜなら、我々は教師という職を一生の職と選び、それによって誇り有る人生を実現しようとしているからです。つまり、人ごとではなく、自分の人生を賭けた人間が集っているのですから強力にもなり、賢明にもなります。その教師たちが「子どもたちの姿」を基礎におくならば、誤り無く成長できます。我々は多くの教師に提案します。子どもたちの姿によって成長しませんか？

我々は同志を求めています。これを実現するためフォーラムを開催することとなりました。是非、多くの方々にご参加頂きたく存じます

目 次

- 1.「子どもに学ぶ教師の会」設立とフォーラム開催にあたって
- 2.会場案内図
- 3.パネルディスカッションパネラー、コーディネーター紹介
- 4.公開ゼミ資料

日 程

1日目(7月28日)

18:30～シンポジウム・懇親会

2日目(7月29日)

9:30～受付開始

10:00～開会の挨拶・講演会 西川純

子どもに「人間力って何？」と聞かれたら、どう答えますか？」

10:40～ パネルディスカッション

「学び合い」って、そんなにいいの？

パネラー：赤坂真二（新潟市立曾野木小学校 教諭）

白石誠史郎（新潟市立鳥屋野中学校 教諭）

勝雅史（新潟県立新潟翠江高等学校 教諭）

美濃山ゆず（新潟県立柏崎常磐高等学校 教諭）

コーディネーター：久保田善彦（上越教育大学 助教授）

12:20～昼休み

13:20～公開ゼミ(討論会) 詳細は裏面

16:50 終了

各時間帯、3つの分科会からお選びになり、その会場にお越しください。

第1分科会	第2分科会	第3分科会
座長：山田純一 新潟市立新関小学校教諭	座長：門野慎一 新潟市立内野小学校教諭	座長：小林秀樹 三条市立第一中学校教諭
13:20～14:20(60分)		
<p>片山敏郎 新潟市立上所小学校 (教諭 情報)</p> <p>「ICT を活用した学び合う授業の在り方」</p>	<p>矢川咲子 上越市立春日小学校 (教諭 特別活動)</p> <p>「小学校1年生の人間関係づくり」</p>	<p>鈴木華奈子 三条市立大崎中学校 (教諭 理科)</p> <p>「特別支援が必要な生徒がいる学級 学力があがる？」</p>
14:30～15:30(60分)		
<p>高島純 佐渡市立河原田小学校 (教諭 算数)</p> <p>「子どもは教えても理解できない」</p>	<p>小日向文人 上越市立春日小学校 (教諭 特別支援教育)</p> <p>「長期観察による軽度発達障害児の学び合い授業の研究」</p>	<p>江川潤 新潟市立五十嵐小学校 (教諭 理科)</p> <p>「授業は教師で変わる」～可視化はテクニックではない～</p>
15:40～16:40(60分)		
<p>杵淵眞 埼玉県本庄市立本庄南小学校 (教諭 社会)</p> <p>「『学び合い』の授業における『目標の設定』と『評価』」</p>	<p>山崎一宏 静岡県志太郡岡部町立岡部小学校 (教諭 学級作り)</p> <p>「学びあうクラスを作る教師のお仕事」</p>	<p>神崎弘範 岐阜県土岐市立西陵中学校 (教諭 理科)</p> <p>「学び合いにより生徒が主体的に進める単元の学習について」</p>

パネラー・コーディネーター紹介

〈パネラー〉

赤坂真二

新潟市立曾野木小学校教諭

アドラー心理学を研究する学校心理士

著書紹介

「学級指導 困ったときの処方箋 - 先生のタイプ別アプローチ - 」¥1400

「小学校高学年女子の指導 困ったときの処方箋」¥1600

「困った児童への言葉がけと指導」¥1600 (全て学陽書房)

白石誠史郎

新潟市立鳥屋野中学校教諭

「学び合いの仕組みと不思議」サークル代表

勝雅史

県立新潟翠江高等学校教諭

元甲子園出場監督(1995年夏・六日町高等学校在勤時)

美濃山ゆず

県立柏崎常盤高等学校教諭

教職4年目期待のニューフェイス

〈コーディネーター〉

久保田善彦(上越教育大学助教授)

つくば市での小・中学校の教員生活を経て、この春より上越教育大学助教授博士(学校教育学)

第1分科会

大研修室右側

座長：山田純一 新潟市立新関小学校教諭

- 1 片山敏郎 新潟市立上所小学校(情報)
「ICTを活用した学び合う授業の在り方」
- 2 高島純 佐渡市立河原田小学校(算数)
「子どもは教えても理解できない」
- 3 杵淵眞 埼玉県本庄市立本庄南小学校
(社会 上教大院M2)
「『学び合い』の授業における『目標の設定』と『評価』」

ICTを活用した学び合う授業の在り方

片山敏郎（新潟市立上所小学校）

1. 私の視点 学び合いを深めるICTの活用

ICTとは、情報通信技術（Information and Communication(s) Technology）のことである。

コンピュータを授業に活用するという考え方は20年以上も前からあり、様々な実践が行われてきた。しかし、一定の成果はあったものの学力向上につながる成果はそう多いとは言えなかった。

また、コンピュータを活用した学習という、個々に学習するというイメージがある。一人一人が画面と向き合い活動をするというイメージから、コンピュータ学習＝個別学習ととらえる向きも多い。

しかしながら、それは昔の話であり、ネットワークを効果的に活用することで、学び合う授業を構想することが可能であり、そのことによって、ICTを活用しない授業以上に学び合いを深めることができるというのが私の主張である。

2. 市小研情報教育部の取り組みから

私が研究推進委員長を務める新潟市小学校教育研究協議会（市小研）の情報教育部では、昨年度から、「他とのかかわり合いの中で、自分の考えを深めていく子供を目ざして - ネットワークを活用した情報の交流を通して - 」を研究の主題とし、学び合いの在り方を考える研修会や授業研究等を通して、研究を進めた。

授業研究では、教科のねらいを達成するために情報機器を活用する授業を行った。紫竹山小学校の水落あき子教諭より、低学年「算数科」において、子供たちがコンピュータを活用して学び合い、教科のねらいにせまる授業を公開していただいた。その中で、児童がネットワークを活用して、他とのかかわり合いの中で学びを深めていく上で、情報機器が効果的に働くことを確認することができた。

3. 私の実践から

私の実践例を紹介する。

4年社会科 単元名

【昔の道具デジタル事典】を作ろう
上所地区のくらしの移り変わり～

この実践では、児童がコンピュータを用いて、「昔の道具のデジタル事典」を作成し、それを用いて、お互いの作品から昔と今の道具の違いを学び合った。

具体的には、自分たちの作成した「昔の道具デジタル事典」から1問ずつ問題を出し合っただクロソワードパズルを作り、それを解きあう活動を行った。

すべてのグループが1問ずつ問題を出し合っただ作成したクロソワードを解きあう活動では、ネットワークを介して他のグループの「昔の道具デジタル事典」を見ることで答えを探し、約15分ですべてのグループが合計10の問題を解くことができた。チームごとに取り組みさせることで、意見交流が頻繁に行われ、たくさんのページをみながら、クロソワードを埋めていくことができた。

これらの学び合う姿は、コンピュータのネットワークを用いたからこそ可能となったものであり、コンピュータ学習＝個別学習という見方を乗り越えることができた一例と考える。

4. 日常的にできるICTの活用

～算数の授業における実物投影機の活用～

私が勤務する新潟市立上所小学校の今年度の研究主題は次の通りである。

学び合いを通して考えを深める子供の育成
～適切に表現し、思考力をはたらかせる授業への改善～

6月に、校内授業研究を行った。単元は4年算数「円と球」である。私の授業のしくみ方が悪く、課題の多い授業となってしまったが、実物投影機の活用については効果的であった。

コンパスで円をかく子供の操作場面を拡大して投影したことにより、「わかった。」「そうか。」というつぶやきが生まれたり、その様子を見ながらすぐにコンパスを取り出し、同じやり方で円をかいたりする姿が生まれた。これは、ICTが考えを伝え合うために効果的に働いたといえる一例だろう。

このように、ICTの活用は、特別なことではなく、例えば、プロジェクターを教室に持ち込むなど、日常的にできるものである。ICTを活用することで情報の共有が容易になり、学び合いがしやすくなるのである。

子どもは教えても理解できない

高島 純（佐渡市立河原田小学校）

1 問題の所在

- A どんなに説明してもわかってくれない子どもたち
- B 簡単な説明だけで、容易にわかってしまう子どもたち

自己の経験より

- ・かけ算の文章題ができない（3年生をもったとき）

計算はできる（かけ算の計算のスピードはクラスでトップ）が、極端に文章題ができない子どもの存在。

指導パターン

「絵をかいてごらん」 描けない

キーワードをたよりに指導（パターン化）

2 臨床的指導による理解研究と、そこで得られた知見

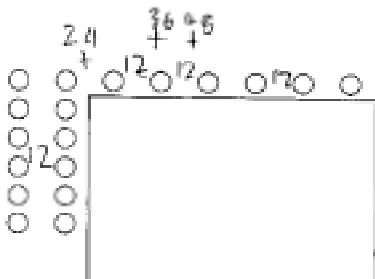
児童の理解の視点からの個別指導より

- ・計算を見直すことによって、文章題を解く糸口ができた。
- ・自発的な知識の構成活動

3 実践事例

教師が子どもにかかわる（教師が子どもに教える：かけ算の意味理解）

九九は唱えることはできるが、文章題ができない子に、まとまりを自ら構成する活動を促しました。



子どもが子どもにかかわる（子どもが子どもに教える：繰り上がりがあるたしざん）

繰り上がりのあるたし算や繰り下がりのあるひき算が苦手な子どもに、その子よりちょっと得意な子どもが教えます。

T：「答えをだすお手伝いをしてね。」

- ・指で数える
 - ・交換法則($a + b = b + a$)
 - ・その他の性質 ($5 + 6 = 5 + 5 + 1$)
- などの多様な見方を教えています。

子ども同士がかかわりあう（子ども同士が教え合う：100より大きい数）

ばらばらになっっているプリントの虫の数を数えます。子どもの解答はばらばらでした。互いに相談しながら修正しています。

T：「数が大きいから、一人で数えてもいいし、友だちと相談してもいいよ。」

4 学習課題のポイント

活動の目的が明確なもの
解決の方法の見通しが持ちやすいものの
パッと見て、答えがわからないもの

かかわり合いを通して、ゆるやかに知識を構成していく

5 結論

Aの子どもたちは、教師がどんなに教えても理解できない。

Bの子どもたちは、教える以前に既に理解に必要な豊かな概念を十分に持っている。（豊かな概念：数の感覚 量の感覚 図形の感覚など）

6 終わりに

子どもが自由に学び合う空間づくり
数値化できない活動を捨てるな

「学び合い」の授業における「目標の設定」と「評価」

6年社会の実践 「学び合い」ってこんなおもしろい

杵淵 眞（埼玉県本庄市立本庄南小学校）

先生が授業を教えるクラス全員が理解するのは難しいと思います。

1 授業後の感想

[表1] 子どもたちの感想から

先生が教えるよりもよく頭にはいるのでテストもよくできました。なので、これからもどんな学習の仕方がいいか、さがしてみたいです。
例えば先生に質問をして、わかりづらい答えが返ってくるより、友達に質問してわかりやすい答えで返ってきた方が良いと思う

2 学び合いのおもしろさ

[表2] 学習のめあて

(1) 学びの多様性

「学び合い」の授業では、学習の目標を明確にする。特に「全員がわかるように」という点を強調する。

その上で、社会科のめあてを自分で立てて、その社会科のめあてを達成するために、「一番良いと思う方法で学習する」。

教師が多様性を保障する。

自分に学びやすい環境を選ぶ

誰と話をすれば良いのか、子どもたちは分かっている。自由に動き回る環境を与えると、自分に合った友達を求めて、学習を

進めていく。話し合いを中心に進めていく子、教科書を丹念に読んで学習する子、図書室へ行き歴史マンガを読んで学習のまとめをする子など様々な学習の形態ができる。

友達関係が良くなる

子どものアンケートにも出てきたが、友達関係が良くなっていく。 [表3] 発話例

質の高い学びが行われる

子どもの発話を聞くと、子どもたち同士で協力して、分からないところを解決しながら質の高い学びが行われていることが分かる。

テストの結果が良くなる

子どもたち同士の質の高い学びから、当然テストの結果は良くなる。

評価を学習と同時に行うことができる

自分たちで学習計画を作り、計画的に学習を進める中で、自分たちの評価も取り入れることができる。

学習が終わった後で、評価をするのではなく、学習を進めながら、自己評価にも取り組めるので、時間はかからない。

3 課題

これから学習する内容を見て、評価規準を作ることができるのか、継続的に研究に取り組みたい。また、一つの教科の「学び合い」から学級全体への「学び合う学級」への発展があるのか、研究を継続したい。

全員がわかるように協力して学習を進めること

- 1 みんなで協力して結論を出すこと。他の班の人たちとも相談しても良い。
- 2 結論だけでなく、全員が理由、考え方がわかるようにすること。
- 3 先生に聞いたり相談したりする前に、友達に相談すること。
- 4 目標を達成するために、一番良いと思う方法で学習して良いこと。
- 5 友達の意見を良く聴くこと。自分と違う意見の中に大切な考えがあること。

あ：一回負けたけど、ついに逆転しちゃって源氏が勝っちゃった

に：天才？義経、闘いの？

あ：あ

や：違うよ、源氏が負けたんだよ。

に：義経って強いよね。

や：騎馬戦がね。

あ：騎馬戦の天才義経。

た：源氏が勝ったんだ

や：源氏が負けたんだよ

あ：源氏が勝ったんだよ

や：負けたんだよ

に：でも義経。けがが

や：平氏との戦いに敗れたんだよ

あ：それから下、読めよ



第2分科会

大研修室左側

座長：門野慎一 新潟市立内野小学校教諭
臨床心理士

- 1 矢川咲子 上越市立春日小学校(特別活動)
「小学校1年生の人間関係づくり」
- 2 小日向文人 上越市立春日小学校
(特別支援教育 上教大院M2)
「長期観察による軽度発達障害児の学び合い授業の研究」
- 3 山崎一宏 静岡県志太郡岡部町立岡部小学校
(学級作り 上教大院OB)
「学びあうクラスを作る教師のお仕事」

小学校入学時期の人間関係づくり

構成的グループ・エンカウンターを活用して

上越市立春日小学校
教諭 矢川 咲子

1 問題の所在

昨今、小学校1年生の教室において、45分間の1単位時間にがまんできず、教室の中を立ち歩き、教師の指示に従わず好き勝手なことをする姿が見られるようになったと聞かれることが多くなった。その解決策として様々な取り組みが行われているが、その解決策の一つとして、構成的グループ・エンカウンター（Structured Group Encounter 以下SGEとする）の導入が効果的なのではないかと考えた。

SGEを小学校入学時に実施することにより、教師と児童、児童同士の人間関係を早い段階から形成される。その結果として、教師と児童、児童同士のリレーションが深まり、小学校1年生の学級で見られる様々な問題の予防につながるのではないかと考えられる。

2 SGE実施上の予想される問題点と対処方法

(1) 実施できるエクササイズが限られている

発達段階を考慮して、ゲーム性の高いものを選択（例えば、あいこジャンケン、鏡よかがみ、ジャンケン列車など）

(2) エクササイズ実施後のシェアリングができない

発言がない場合は教師が発問を考えて挙手を求める。また、エクササイズ後、教師が積極的に自分の感じたことを話す（モデリング？）

(3) 実施時間の確保

朝の会、帰りの会、教科と関連させて実施する。ショート・エクササイズを実施する。

(4) 実施する教師の力量

エクササイズ集などに書かれているマニュアルをしっかりと読む。

3 結果

Q-Uの結果から（4/12実施 6/5実施）

学校生活意欲尺度・・・友達関係（10.1 10.2）学習意欲（10.5 10.7）

学級の雰囲気（11.3 10.4）学校生活意欲（32.0 31.3）

学級満足度尺度・・・承認得点（19.1 18.8）被侵害得点（10.7 11.0）

友達関係、学習意欲がわずかに上昇したが、それ以外はよい結果は得られなかった。

SGE実施は効果がなかったのか？

細かく分析すると

同一保育所出身者以外の児童の被侵害得点が有意に下がったことがわかった。

4 課題

SGEの実施だけでなく、リレーションを深めるために担任教師が入学時に行わなければならないことは何かを考える。

長期観察による軽度発達障害児と学び合いの授業の研究

新潟県上越市立春日小学校

小日向 文人

Aさんからのインタビューより

人と関わるのは苦手なんだけど、授業中、友達に関わってくれる時はうれしい。じゃまもの扱いにされない。でも、中学になったら、今の授業も先生も変わるから不安……。

1 目的

このAさんは、多動傾向のある子どもで、4年生の時まで教室に戻ってもこれず、教室にいても、一人立ち歩いていたり、教室を飛び出していったりする子だった。そのために、学校では、介助員をつけるようになった。

しかし、5年生になると次第と教室から飛び出していくこともなくなり、介助員もつがなくなってしまう。6年になってはじめて教室を参観したときどこにその子がいるか全く分からなかった、そして修学旅行も無事に参加することができた。

そこで、このクラスを長期にわたって調べることによって、何らかの原因が見つけたせらだろうと思い、調査に入ることにした。

2 担任の授業の様子

授業における教師の役割は、学習の場作りを中心に行う。あくまでも子どもたちが学習を進めることを大切にしている。

授業は、至ってふつうの授業である。算数ならば、例題を一斉授業で行い、解かせる。そして練習問題を解かせる。分からなければ、立って教えてもらいたい友達に聞きに行く。できれば、友達から を付けてもらう。分からない友達がいたら、近くによっていつのぞき込んで教えはじめる。学び合う雰囲気ができあがっていた。当然、軽度発達障害の子どもも立ち歩きながら、情報をと入りいれようと動き回っていたが、なんら気にならなかった。

3 子どもどうしの関係

子どもはみんながみんなお人好しじゃない

「A児の行動と他の児童との比較について」

A児がどのように人に関わっていくかを分析した。そうすると、自分から接触していく回数（自己接触）は平均とほぼ変わらないが、相手から接触される回数が極端に低いことが分かる。しかし、軽度発達障害でなくても関わりをうまくとれない子もいる。そう見ていくとふつうに感じて見られるようになる。

「A児と関わる子どもとの行動と発話について」

発話・行動内容を5つのカテゴリー（無視、非難、一方的、受け入れ、相互）に分けた。関わる個々によって、行動は異なっていたが、普段は 交流がない友達とも、学習を通して教え合う姿が多く見られた。また、クラスの半数以上の子どもとの接触が見られた。

4 その他

第一次調査での失敗から気づいたこと（2年生の実践から）

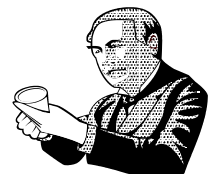
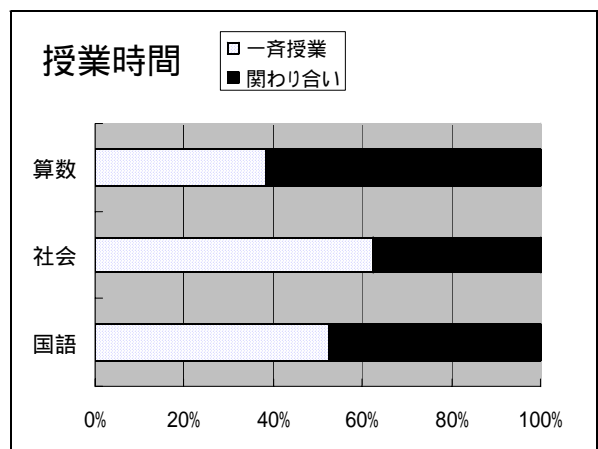
グループ学習における拘束と自由な関わりの違い

（約束事）

目標を達成するために、一番いいと思う方法で学習していいこと。そしてその方法がどういいのかを理由づけることができること。
人を傷つけてはいけないこと。

（お願い事）

正解を求めるのではなく、全員で協力して取りむこと。



学びあうクラスを持つ教師のお仕事

氏名 山崎 一宏
(静岡県志太郡岡部町立岡部小学校)

はじめに

西川研究室の主張は、「子どもを信じる」ということです。極めてシンプルな言葉ですが、いざ実践の場になると教師の多くは、子どもの何を信じれば良いのかという混乱に陥ってしまいます。この混乱に陥らないように西川研では、これまで事例を通して、学習者(子ども)の有能性を説いてきました。「子どもの有能さ」を実証してきたことは、学びあう授業の実現を目指してきた教師に子どもを信じる勇気を与え、実践を支えてきたのです。

そして、自分自身も先輩の成果を基に子どもを信じ、子ども同士が学びあう授業を実践しようとしてきましたが、どうしても「子どもを信じる」ということを自分の言葉で表すことができませんでした。

しかし、今年のクラスを担当してきて、「教師が子どもを信じるというのは、教師が子どもとコミュニケーションがとれると実感できる」という言葉で表せるのではないかを考えました。

そこで、今のクラスの状況や実践から、「信じるということは、互いのいいたいことが伝わっていると実感できること」といえたのかを説明していきたいと思います。

1. 「今年の子どもはさあ・・・」 (向き合う子どもの実情)

- (1) 子どもの持っている問題
相手の話を聞くことが苦手
表面だけの仲良し
学習するための「道具」が少ない
 - ・言葉・語彙の量
 - ・人と違う考えを言う勇氣
 - ・作業をする技術
 - ・計算する技術・文字を書く技術
- (2) 子どもの持っている力
個々の中にあるアイデア
思ったことをすぐに言える
相手の力を見抜く力

2. 「あのね、先生はね・・・」 (子どもたちに思う教師の願い)

- (1) 自分の良さを出し合う集団
- (2) 相手の良さを認める集団
- (3) 自分の目標を達成するために集団の中で考え、行動できる

3. 「だからさあ・・・」 (学びあいの実現のための教師の手だて)

- (1) 子どもとの関係を確立する
指導者的立場と相談者の立場
目標設定者としての立場
- (2) 仲間を意識できる場を設定する
班の編成と机の配置
授業で話し合いができる場面
学びたいときに学べる教室
「仲間づくり」活動の導入

4. 「これっていいかも・・・」 (子どもたちに見えてきた変化)

- (1) 静かに話が聞ける・本が読める教室
- (2) 授業の中のつぶやきとそのつぶやきの「鎖」
- (3) 時間を忘れて学習する
- (4) 仲間とのかかわりをよいと感じている
- (5) 授業参観に参加した保護者の声

5 まとめ

結局、子どもを信じるのは、教師なのです。これまで自分が持っていた捉われていたものは、子どもを信じるという行為の責任や要因を子どもの中に求めていたことです。子どもは有能です。でもその有能さだけを信じる根拠にするのではなく、子どもの行動から有能さを見出し、有能さのすばらしさを子どもと共有できることを信じる根拠とするのです。

そして、学びあうクラスは、教師と子どもとの生活の中で培われた切れない関わりが、支えとなり、子どもが、課題達成のために自由に活動できます。互いに「信じる」ことができる活動を計画し、実行していくことが学びあうクラスを持つ教師のお仕事といえるでしょう。

第3分科会

小研修室

座長：小林秀樹 三条市立第一中学校教諭

- 1 鈴木華奈子 三条市立大崎中学校(理科)
「特別支援が必要な生徒がいる学級 学力があがる？」
- 2 江川潤 新潟市立五十嵐小学校(理科)
「授業は教師で変わる」～可視化はテクニックではない～
- 3 神崎弘範 岐阜県土岐市立西陵中学校
(理科 上教大院M2)
「学び合いにより生徒が主体的に進める単元の学習について」

特別支援を要する生徒がいる通常学級 学力があがる？

～ 個別支援から共通支援へ～

三条市立大崎中学校
鈴木 華奈子

1 現状にある課題

(1) "特別"にかまえてしまう教師

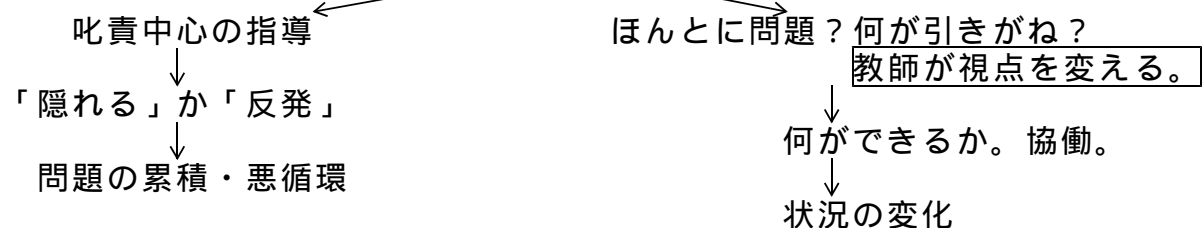
- ・意識調査の低迷
- ・"特別"と甘やかす
- ・"特別"と困惑

(2) 個別支援の限界

- ・物理的な限界
- ・手法の限界
- ・学習集団のねじれ

2 特別支援を要する生徒の把握

授業で気になる生徒(問題行動)



3 "特別"でない授業での共通支援

- (1) 少なく、ゆっくりと「言葉を置く。」
- (2) 図と具体物で「見せる。」
- (3) 「みんなで見つけよう！」
- (4) みんなのルールは・・・。

- (5) +イメージをフィードバック
- (6) 理科室の構造化

聞きやすく。
見て分かる。
"共同"
みんなが安心・安全に参加
するための共通ルール
多様なよさの確認・強化
場所と用具・場所と行動
時間と行動

4 授業での生徒の変化

- (1) 対象生徒への非難の声の減少
- (2) 作業への参加時間の増加
- (3) 立ち歩きの減少
- (4) 班の生徒の会話の変化
- (5) 実験机への体の向き方

5 他の調査による変化

- (1) Q-U
- (2) NRT

6 今後の課題

- (1) 全員が支援者・指導者
- (2) どの授業でも共通支援
- (3) 共通支援と個別の指導計画

授業は教師で変わる ～可視化はテクニックではない～

江川 潤（新潟市立五十嵐小学校）

1. はじめに

私は、理科学習が大好きである。子どもの頃から好きであった。ただし、全ての授業において楽しさを感じたわけではない。私の知る限り、理科嫌いの子どもなどまづもっていない。「えー」「ほー」「ふむふむ」「なんで？」と子どもたちは生き生きと学習している。ところが、「あなたは、理科が好きですか」というアンケートを行うと、授業中の様子に反した結果がでる場合がある。このことから、「改善すべきは授業なり」ということを考えている。

2. 理科好きの割合

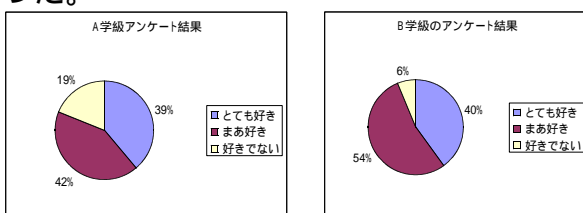
ベネッセ教育研究所の「理科が好き」（とても好き、まあ好き）な児童（小学校5年生）の調査結果は次のようであった。

1990年(71.4%)	1996年(71.3%)
2001年(68.2%)	2005年(60.2%)

2001年～2005年で大きく減少していることを、「子どもだけでなく、教師が自然を調べる楽しみを実感できない現状がある」と、角屋重樹氏（広島大学教授）が分析された。また、今年度、新潟市小学校教育研究会理科部全体会に於いて、「子どもたちは、自分たちを理科好きな子どもに育ててくれる、理科好きの先生を求めている」と、新潟市教育委員会学校指導課木澤英二先生が御指導くださった。

3. 可視化を意識すると

五十嵐小学校6年生の2学級で、上記のアンケートを行った結果は次のようであった。

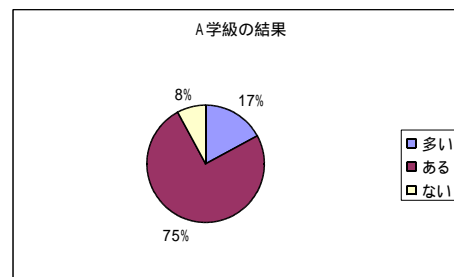


どちらの学級も、「理科が好き」（とても好き、まあ好き）な子どもが80%以上であった。2学級を合わせた場合の「理科が好き」（とても好き、まあ好き）な子どもは、90%であった。

次のアンケート結果から、「理科好き」に関する2つのデータの差に、可視化が関わっていると考えている。

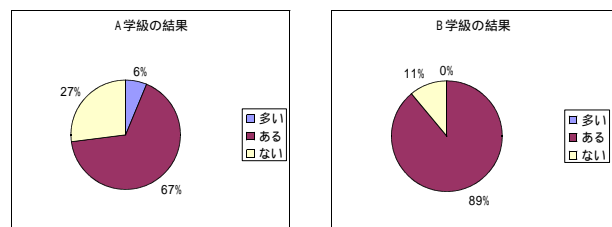
理科学習の特徴をとらえるためのアンケート結果

班の人と相談すること



B学級の結果	・ 多い	0%
	・ ある	100%
	・ ない	0%

他の班を見に行くこと



4. 終わりに

可視化が各教科領域に有効であることは、臨床教育学会員を始めとする実践でありかになっている。子どもが考え主体的に学習する姿がそこにはある。だから、学習者である子どもは生き生きし、「楽しい」といいたくなるのではないだろうか。

参考文献

西川 純（著） 平成17年12月
「忙しい！」を誰も言わない学校
（株式会社東洋館出版社）

「学び合い」により生徒が主体的に進める単元の学習について 中学校理科・生徒による教科書作りの活動から -

神崎 弘範（岐阜県土岐市立西陵中学校）

はじめに

「生きる力」の構成要素の一つである「確かな学力」は、その定義から、知識や技能の習得を第一義としながらも、主体的に学ぶ姿勢の育成をも包括している。

辺士名・西川は、授業の中で、学習者が自由なコミュニケーションを行い、学習環境を再構築する場と時間が保証されることで、自主的な学びへと転換されることを明らかにしている。¹⁾また、石崎・西川は、教師が授業において、学習目標の明確化・可視化の促進・クラス全体への評価・立ち歩きの促進といった環境を整え、子どもの有能性を信じ、方法を多く語ることを控えることで、学習課題の解決を子ども自ら行うことができるとしている。²⁾これらは、教師の役割を主に「目標の設定」「評価」「環境の設定」に特化することで子ども相互の「学び合い」を促進させており、子どもが「学び合い」により主体的に学習することを示唆したものといえる。

そこで、本研究は、「学び合い」の手法についてはこれらの先行研究をふまえながらも、さらに進めるかたちで、学習内容を単位時間に区切ることなく、単元の全てを子どもに任せることにした。さらに、共通の目標として班オリジナルの教科書作りをすることで得られた主体的な生徒の学びの姿について報告をするものである。

活動内容について

調査は「電流」の単元の「2章 電流のはたらき」で行った。生徒には、10 時間の時間を与え、この小単元を全て自分達で学習し、その内容について班（全8班）ごとに1冊の教科書を作るよう指示した。その際、以下の2点を強調した。

- ・ 「誰が読んでもよく分かる教科書」「学習の道具として使いたくなる教科書」を作ること。
 - ・ 学習内容については全員が理解していること。
- 結果と考察

(1)「単元全体を生徒に任せることで表出された主体性について」

単元全体を生徒に任せたことで、始業をそろえる必要がなくなった。その結果、ほぼ全ての時間において、全ての班が始業前に理科室への移動を完了するとともに、学習活動を始めていた。

この間の生徒の平均活動時間は53分17秒であった。生徒が、自らの意思で主体的に学習活動を始めていることが分かる。

(2)「教科書作りの活動から表出された生徒の主体性について」

活動の目標を教科書作りとしたことにより、生徒には、自分達が十分に理解した上で、より分かりやすく表現しようとする姿がみられた。自分達が実際に実験をした上で、起きたミスを注意事項として教科書に位置付けたり、オリジナルの図を工夫し分かりやすい説明にしようしたりする姿が見られた。教科書の記述をそのまま受け入れるのではなく、自分達なりの理解をし、それを表現しようとする姿勢に主体性が現れている。

終わりに

本研究から、単元を任された生徒は教師の直接的なかわりがなくても、仲間とかかわりながら、見通しをもち、主体的に学習活動を行うことができることが明らかになった。また、教科書作りの活動により、生徒はより分かりやすい教科書を目指して、実際に経験したことや自分達なりの分かり方を教科書作りに反映させるなど、質の高い学びを展開できることが明らかになった。

【参考文献】

- 1) 辺士名智子・西川純(2003)「中学生の教科書学習への参加構造と学びの関連性」臨床教科教育学会誌 第2巻第1号 29 - 37
- 2) 石崎隆・西川純(2004)「立ち歩きによる学び合いの発展に関する研究」臨床教科教育学会誌 第3巻第1号 11 - 35